読書の時間的条件：世代と年齢

大場博幸 慶応義塾大学大学院博士課程 図書館・情報学専攻

1.はじめに

読書に関する研究では、二つの異なった時間の観念が使用されている。一つは「世代」であり、歴史社会学的な研究の基本的な視角を形成している。もう一つは「年齢」であり、教育心理学的な研究において、個人における読書の経験以前と以後といった変化のコンテクストとなっている。これら二つの概念は全く別の研究に使用されているが、同じ対象に同時に適用しても問題は無い。

2.年齢上の読書経験

教育心理学で語られる「読書」においては、特定の時期の読者しか扱われていない。その対象は、言語や情操、人格などについて発達途上にある幼年期から、人格完成期にあたる青少年期までである。おそらく、この時期の読者は、出会う書物によって知的にも人格的にも強い影響を受ける、と想定されているからであろう。

この以降の時期の読者とは、すでに完成された人格の持主として想定される。彼らにはすでに選択原理があり、新たにそれを身につける必要はない。彼らにとって、本を読むことは、全人格的な取組みとはならないのである。実際にそうであるかはともかく、大人の読者が興味の対象となりにくいのは、読後の変化が、若年層ほど想定し難いというところにあるだろう。

3.読書が効果を持つ時期

それでは、読書のインパクトは若年層とそれ以降では実際に異なるのだろうか？回想記における、読書経験の言及から推察してみる。

まず、日経新聞連載コラム『私の履歴書』(期間：1956 年 4 月-74 年 4 月)から、読書の言及箇所を拾った。ただし、抽出の条件は、①言及者の出生年が分かり、②言及されている著作のジャンルが特定でき、なおかつ③その著作が読まれた時期が特定できるもの、に限られている。このような箇所はのべ 270 件あった。

こうした自伝でわざわざ語られる読書は、著者らの経験や人生観に印象深いものだったと判断できる。そのような読書が経験された時期を、以下のようにカウントした。

a.10 代後半程度までの読書の言及数

b.大学・社会人以降の読書の言及数

結果は、a:b = 216:54 で、10 代後半程度までに経験された読書の方が 4 倍の割合で思い返されることが多い。また、大学・社会

人以降の読書言及も、記述からおそらくほぼ20 代までの経験だと推測できるものがほとんどである。

したがって、個人差はあるものの中年以降の読書経験はライフコースにおいて特別重要なインパクトを持たない、ということが示されうる。この結論は、教育心理学の若年層重視の視点を裏付けている。

4.家族内的位地としての「年齢」

上のように個人史においては、年齢によって読書の意味は異なってくる。ただし、このとき問題となるのは生物学的な実年齢ではなく、社会関係における特定の役割によって決定される年齢である。

ここで想定されている「年齢」は Persons が親族関係のコンテクストで使用している'generation'の概念に近い。彼は、子ども、親、祖父母といった、人々の家族内における位置関係を示すためにこの概念を使っている。普通'generation'は「世代」と訳されるが、一般には社会学で定義されるものとは別の意味を与えられているため、「年齢」の語を充てた方が混乱は少ない。

若年層は、家族内での役割関係の上では「子ども」として分類されるが、読書の分析においてはこれでは大雑把すぎる。そのため、所属する教育機関のレベルに合わせてより細かくこの期間が分類される。一般的には、幼児期、小学生程度を対象とする学童期、中学・高校などの中等教育機関に所属する時期、高等教育機関等に所属したり実際に労働者として働いていたりする時期、に分けられる。

5.若年齢期における読書

大人と若年層における読書の意味の差はすでに示された。では、若年齢期内部においてその意味は変化するのだろうか。先程と同じ『私の履歴書』のデータを使って次に示す。「年齢」の分類は、①幼児期から尋常小学校生・高等小学校生(現在の中学生程度)までを含む「幼年・少年期」、②旧制中学校所属程度の年齢である「10 代半ば」、③旧制高校所属程度の年齢である「10 代後半」、④それ以上となる「大学生・社会人以上」、の四つになった。前節で挙げた標準的な分類とは異なるものの、データの記述から著者らが意識す

表1年齢と読書内容

	漢籍	講談物･少年向け読物	近代小説･詩歌等	その他	総言及数
幼年･少年期	24	27	13	15	79
10代半ば(旧制中学校生程	5	8	33	26	72
10代後半(旧制高校生程		1	30	34	65
大学生･社会人以上	5		10	39	54
total	34	36	86	114	270
幼年･少年期	30%	34%	16%	19%	29%
10代半ば(旧制中学校生程	7%	11%	46%	36%	27%
10代後半(旧制高校生程	0%	2%	46%	52%	24%
大学生･社会人以上	9%	0%	19%	72%	20%
total	13%	13%	32%	42%	100%

る「年齢」を反映するもっとも適切なカテゴライズだと思われる。

表１は年齢と読書内容の変化について示している。このうち、総言及数の列からは、年齢が上がるに連れて読書言及自体が減ってゆくのが分かる。もっとも、幼年・少年期の期間が長く、10 代半ばと 10 代後半のそれぞれの期間が短いことを考えあわせれば、10 代半ばから後半にかけて行われる読書の印象はかなり強いものであると言える。

時代は大きく異なるが、全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共同して毎年行なっている読書調査報告も「年齢」を基準にデータを採取している。ただし、『私の履歴書』ではもっとも印象を受けやすい時期にあたる高校生の時期の読書量は、過去 30 年以上にわたって小中学生より少ない。量と質の関係はよくわからないまま残されている。

6.年齢と読書内容

読書内容は、①漢籍、②講談物・少年向け読み物(少年雑誌やお伽草子なども含む)、③近代小説・詩歌等(西洋古典文学も含む)、④その他(主に日本古典・哲学・宗教・専門書などのタイトル)の四つに分けた。

加齢にしたがって、単純な内容や表現を持つ本から、複雑だと思われる本へ興味をシフトさせると考えられる。予想通り、講談物や少年向け読み物の言及が減り、近代小説やその他への言及が増える、という傾向が現れている。

しかし、「年齢」概念は、これ以上の読書内容の変化を十分に説明するわけではない。例えば、なぜ漢籍が幼年・少年期に集中して現われるのかを理解させてくれない。こうした点は、データ元の歴史性に依存しており、一般的な社会的・家族的役割の概念からは疑問を解決できないと言える。

読書の内容や特定のタイトルに踏み込んだ分析をするためには、また別のアプローチが必要となる。

7.世代と読書内容

「世代」は同一の歴史的時間をともに通過する集団に対して使われる。社会学では、特にこうした意味での世代を「コーホート(cohort)」と呼んでいる。特定の時代に目立つ書籍やジャンルまで立ち入る分析はこの概念からアプローチするのがふさわしい。

表２は、同じく『私の履歴書』のデータを

表2 世代と読書内容

出生年	漢籍	講談物･少年向け読物	近代小説･詩歌等	その他	総言及数
明治01-20年	13	7	6	17	43
明治21-30年	14	12	50	55	131
明治31-44年	7	17	30	42	96
total	34	36	86	114	270
明治01-20年	30%	16%	14%	40%	16%
明治21-30年	11%	9%	38%	42%	49%
明治31-44年	7%	18%	31%	44%	36%
total	13%	13%	32%	42%	100%

用い、著者の出生年を三グループの世代に分けて読書内容の変化を分析したものである。三グループの分割は明治の初期・中期・後期を基準にした便宜的なもので、その境界に特に意味があるわけではない。

これにより、漢籍が幼年・少年期に「読まれたもの」としてしばしば言及されるのは限定的・歴史的なもので、明治初期の世代を頂点に衰退していったことが分かる。記述を詳しく見れば、当時の旧階級の伝統であり、個人的な近代読書というよりは、家族または親族の指導の下で行われる営みである。

社会が複雑になるにつれて複雑な内容を持つ書籍が読まれたかどうか、については年齢の積み重ねによる変化ほど明らかではない。漢籍以外の読書内容のジャンルには、特に目立った傾向は見られない。

8.結論－選択原理の形成

第5節での『私の履歴書』の検証から、年齢は、読書の印象の度合いを決定することがわかった。特に、10 代半ばから後半にかけての読書のインパクトは大きい。回想者らにも十分それは意識されており、挙げられたタイトルがまったく聞いたこともないようなものは少ない。彼らにみられる近代文学への強い志向は、当時の文化装置だった学校制度が培ったものだと推測できる。

幼年・少年期の読書内容からは、講談物・少年向け読み物の充実というトレンドがわかる。おそらく「子ども向け」の出版物市場が形成されてきたことを示しているのだろう。この当時から、低年齢層の文化生活・消費生活に資本が介入し、家族的あるいは階級的文化がそれに対抗する価値を打ち出せない傾向がうかがえる。

明治に 10 代を過ごした各世代は学校制度を支えにした読者共同体を形成していた。しかし、現在の日本にそのような文化的再生産を支えるシステムは皆無に等しい。2000 年に行われた第 46 回の読書調査報告において、アンケートで出現数の多かった本をリストアップした「5月1か月間に読んだ本」では、小中高すべてにおいて、歴史物や伝記以外に世代間で長い連続性のあるタイトルは見つけられない。若年各層の読者共同体はマーケティングによって支えられているのである。しかも、その傾向は年齢が上がるにつれて強く出ている。

参考文献

Jones, Gill and Wallace, Claire. Youth, Family and Citizenship. Open University Press. 1992.

Persons, T and Bales, R.F. Family: Socialization and Interaction Process. Routledge. 1956.

全国 SLA 調査部. 学校図書館. No.601. 2000 年 11 月, p.15-37